

### 第3 問題作成部会の見解

#### 1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 高等学校学習指導要領では、外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにすることを目標としていることを踏まえて、4技能のうち「読むこと」「聞くこと」の中でこれらの知識が活用できるかを評価する。したがって、発音、アクセント、語句整序などを単独で問う問題は作成しないこととする。
- 「リーディング」「リスニング」ともに、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）を参考に、各CEFRレベルにふさわしいテキスト作成と設問設定を行うことで、A1からB1レベルに相当する問題を作成する。また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 「リーディング」については、様々なテキストから概要や要点を把握する力や必要とする情報を読み取る力等を問うことをねらいとする。表記については、現在国際的に広く使用されているアメリカ英語に加えて、場面設定によってイギリス英語を使用することもある。
- 「リスニング」については、生徒の身近な暮らしや社会での暮らしに関わる内容について、概要や要点を把握する力や必要とする情報を聞き取る力等を問うことをねらいとする。音声については、多様な話者による現代の標準的な英語を使用する。

読み上げ回数については、英語の試行調査の結果や資格・検定試験におけるリスニング試験の一般的な在り方を踏まえ、問題の数の充実を図ることによりテストの信頼性が更に向上することを目的として、1回読みを含める。十分な読み上げ時間を確保し、重要な情報は形を変えて複数回言及するなど、自然なコミュニケーションに近い英語の問題を含めて検討する。全ての問題を1回読みにする可能性についても今後検証しつつ、当面は1回読みと2回読みの両方の問題を含む構成で実施することとする。
- グローバル人材の育成を目指した英語教育改革の方向性の中で高等学校学習指導要領に示す4技能のバランスの良い育成が求められていることを踏まえ、「リーディング」と「リスニング」の配点を均等とする。ただし、各大学の入学者選抜において、具体的にどの技能にどの程度の比重を置くかについては、4技能を総合的に評価するよう努めるという「大学入学共通テスト実施方針」（平成29年7月）を踏まえた各大学の判断となる。

#### 2 各問題の出題意図と解答結果

- ・ 第1問は、英語の特徴やきまりに関する知識・技能（特に文構造及び文法事項）に基づき、身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い発話を聞いて、必要な情報や、発話内容の概要や要点を把握する力を問う。日常的な内容の文を聞いて、内容が合っている選択肢（セクションAでは文、セクションBではイラスト）を選ぶ問題である。

第1問の正答率はおおむね非常に高かった。問4のように、文脈を捉え、全体として何が起きている（又は起きる予定である）かを理解する必要のある問題では正答率が下がる傾向があった。このことから受験者の中には、発話内容の事実確認を超えて、状況を理解するために、その話題の細部を聞き取ることが求められるような問題に対応することにおいて、弱点のある者もいることが示唆された。
- ・ 第2問は、身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い対話を、場面の情報とイラストを参考にしながら聞き取ることを通じて、必要な情報を把握する力を問う。日常的な短い対話を

聞いて、設問に対する答えをイラストから選ぶ問題である。

第2問の正答率はおおむね非常に高かった。文脈が与えられ、対話の中で必要な情報が分散して示されていること、また選択肢がイラストであることがその主な理由であると考えられる。問8、10、11の正答率が著しく高かった。提示される順に情報を照合し、各々の条件を確認することで正答に至ることができるものであったためと考えられる。

- 第3問は、身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い対話を、場面の情報を参考にしながら聞き取ることを通じて、概要や要点を目的に応じて把握する力を問う。日常的な対話を聞いて、対話内容に関する設問の答えとなる選択肢を選ぶ問題である。対話は言語の機能（例：確認、依頼、誘い等）を軸に作られており、小問6題のうち、今回は問14と問16をイギリス英語による発音とした。また、この大問から音声は1度しか流れない。

第3問全体の得点率は一部高い設問はあったが、おおむね適切な正答率の範囲であったと考える。問13は、状況推測が容易だったようで、正答率が高くなった。問15では、冊子上に与えられている日本語の状況から推測できる話の展開と、その後の問いとの間に、英語を確認しなければ勘違いする可能性が低かったことから、正答率が高くなったものとする。

- 第4問Aは、必要な情報を聞き取り、図表を完成させたり、分類や並べ替えをしたりすることを通して、話し手の意図を把握する力を問う。最初の問題は、話の順序に図を並べ替える問題であった。トピックは遊園地を訪れた際に行なったことであった。また問22～25は、表を完成させる問題であった。内容は、留学先の夏季講座のスケジュールを確認するものである。第4問Aは、第1問の文（2回読み）・第2問の対話（2回読み）・第3問の対話（1回読み）から、長めのモノログに移行する設問としてのつなぎの役割を果たしている。

問18～21は、正答率が高く、受験者にとってトピックが身近なもので状況から話の展開がある程度正しく推測することが容易であったことと、上述の「提示される順に情報を照合し、各々の条件を確認することで正答に至ることができるもの」であったことがその理由と考えられた。表を完成させる問22～25の正答率もおおむね高く、理由としては問18～21と同じようなことが考えられる。

第4問Bは、複数の情報を聞き、最も条件に合う選択肢を1つ選ぶことを通じて、状況・条件に基づき比較して判断する力を問う。クラスで行う文化祭の出し物を決めるために、四人のクラスメートのアイデアを聞き、考えている条件に最も合う候補者を決めるというものであった。正答率は高く、第4問全体に関して、受験者の対策が整っているように感じられる。音声は、四人の話者のうち、一人はイギリス英語、一人は日本語母語話者による。

- 第5問は、身近な話題や知識のある社会的な話題に関する講義を聞き、メモを取ることを通じて概要や要点を捉える力や、聞き取った情報と図表から読み取れる情報を組み合わせて判断する力を問う。トピックは人間社会にもはや不可欠となったガラスを取り上げ、その特性に関する講義を聞く形式であった。講義を聞いて、内容理解・情報整理・論点把握をし、更に講義内容と図表情報の統合をすることが求められている。

相対的な難易度がやや高い大問であるが、得点率が著しく低い問題があった。問28～31が、例年と異なり、ワークシートの空欄を埋める問題が単語ではなかったこと、講義の内容とワークシートの形式を統合して正答を導くことが英語力を超えて認知的に複雑であったことなどが考えられる。問27、32、33に関しては、正答率は標準的な範囲にあり、十分な識別を得ることに寄与している。

- 第6問Aは、身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する会話や議論を聞き、話者の発話の要点を選ぶことを通じて、必要な情報を把握する力や、それらの情報を統合して要点を整理し、

判断する力を問う。旅行中の移動方法について意見交換をする二人の会話を聞き、会話の趣旨を判断する。

第6問Aの正答率は標準的な範囲にあった。識別力は高く、全体を通じて会話の内容を理解すること無しに正答に至ることはまれであると考えられる。

第6問Bは、身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する会話や議論を聞き、それぞれの話者の立場を判断し、意見を支持する図表を選ぶことを通じて、必要な情報を把握する力や、それらの情報を統合して要点を整理し、判断する力を問う。運動を始めるかどうか議論する四人の意見交換を聞き、話者の立場を判断するものであった。

第6問Bでは、四人の話者が登場するが、四人の話者を聞き分けることができるように、男女の声に加えアメリカ英語・イギリス英語・日本語母語話者による英語の発音による区別があり、昨年度と同様、会話の中でお互いの名前を呼び合うといった工夫がなされた。問37の正答率が著しく高くなったが、それは図表の中に与えられた文字情報が、音声内で言及されたキーワードと一致し、それを選択することが正答に至る形式であったことが理由と考える。

### 3 自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

本テストについて、教育研究団体からは、「今年度も、『知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視する』という共通テストの問題作成方針がしっかりと反映されたものであった」との評価を受けた。

また、高等学校教科担当教員からは、「学習指導要領に基づくものであった」との評価を得た。また、多様な話者による英語が使用されていることも、高く評価された。思考力・判断力・表現力等を必要とする、話者の意図、含意と文脈、内容理解を問うような問題、受験者が既存の知識や体験などと関連付けて理解できるような話題や身近な暮らしや社会での暮らしに関わる題材で、日常生活で用いられる自然な表現を示せるような問題の作成を続けていきたい。

一方で、出題に関して幾つかの指摘もあったが、以下に主な意見とそれに対する問題作成部会としての見解を述べる。

- ・ 第1問については、「問1から問4へと徐々に難易度が上がっており、受験者にとって徐々に問題に慣れていくことが可能となった」との指摘を受けた。本テストを通じて、なるべく難易度の低い小問から徐々に難易度が上がっていくよう工夫をしており、今後も徐々に英語に耳を慣らし続けていける流れを作る方針を継続したい。
- ・ 第2問については、「第1問B及び第2問での正しいイラストを選択する問題については、問題の形式の在り方そのものを検討する時期に来ていると言える」との指摘を受けた。抜本的な問題形式見直しの可能性に関して、今後検討していきたい。
- ・ 第3問については、「アメリカ英語以外の話者も含まれていたが、聞き取る上で大きな影響はなかった」との指摘を受けた。今後も引き続き様々な視点からの場面設定に取り組むこととする。
- ・ 第4問については、「聞き取った内容と資料を結び付けて考えさせる問題は、日々の授業運営にも好ましい影響を与えるものであり、今後も継続が望まれる」との指摘を受けた。形式の固定化・パターン化から、難易度の調整に困難があるが、今後も良問の作成に取り組みたい。
- ・ 第5問では、講義とワークシートの内容に関して、改善の余地があるとの指摘を受けた。また、聞かなくても解けるような箇所もあったという指摘もあり、これについては、きちんと全てを聞かないと解けない問題の作成を今後も目指すこととする。また、トピックの選定に関して、慎重に取り組むたい。

- ・ 第6問では、「話者の声や英語にそれぞれ特徴があり、それぞれの名前も頻繁に登場するので、誰の発言なのか分かりやすく、配慮が感じられた」との指摘を受けた。今後も話者の選択には十分な注意を払うようにしたい。

全体に、トピックについて、多くの受験者にとって身近であり、経験したことがあると思われるようなものが選ばれていることが評価されていた。但し、社会的話題をもう少し取り入れる必要性に関しても言及があり、今後の問題作成の参考としたい。

#### 4 ま と め

本テストの平均点は67.24点であり、前年度と比べて4.89点高くなった。全体としてはやや易化との評価であった。共通テストの出題形式に受験者が慣れてきたこと、受験者が4技能の学習を強化した結果、小学校からの英語学習経験によりリスニング力が全体的に向上したことなどの可能性が示唆される。

本テストは、4技能のバランスを意識し、場面設定などを日本語で表記することで、測る力を「聞く力」に集約している。また、様々なコミュニケーションの場面や状況を設定し、学習指導要領の方針を汲んだものとした。英語の多様化についても一定程度体现化できたと考える。こうした方向性については、今後も継続していきたい。

共通テストの高等学校の授業改善へ及ぼす影響が大きいことは、高等学校教科担当教員からの見解でも示された。高等学校において、生徒各自が、コミュニケーション・ツールとしての英語を体験できるような授業や指導の在り方を模索していくべきであるという見解は、問題作成部会も同じ思いである。

教育研究団体からは、テストの平均点の上昇を憂慮し、安定を求める指摘があった。また、思考力や判断力が求められるような、英語運用能力を意識した問題作成の継続が要望された。

問題作成部会としては、共通テストが引き続き、様々な場面で「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」につながる波及効果があるものとなるようにこれからも尽力していきたい。